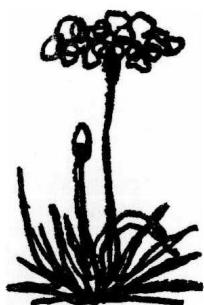


泥^{どろ}棒^{ぼう}っ子^こ

川竹 嗟峨夫





少年少女／創作文学

どろ ぼう つ こ
泥 棒 子

N. D. C. 913 偕成社 214p. 21cm 1976年

1975年12月 1刷

1976年12月 4刷

著 者 かわ たけ さ が お
 川 竹 嵯 峨 夫

発行者 今 村 広

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5

T E L (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京 5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-719360-0904

© 川竹嵯峨夫 北島新平 1975

Printed in Japan

泥^{どろ}棒^{ぼう}っ子^こ

川竹 嵯峨夫



it

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

はしがき

丘^{おか}の上の村へむかう坂道^{さかみち}を、いっしょにう
たいながら、のぼってくる声がきこえます。

学帽^{がくぼう}がひとつ、あらわれました。その右に
ぼうず頭^{ぼうずがしら}が。おや、まん中にもうひとつ、お
かっぱ頭^{かっぱがしら}がでてきました。リズムにあわせて、
おかっぱ頭^{かっぱがしら}がゆれています。三人の手は、な
かよくつながれています。

学帽^{がくぼう}は中学二、三年、ぼうず頭^{ぼうずがしら}が小学四、
五年、おかっぱの女の子は、まだ五、六歳^{さい}で
しょうか。

しずみかけた夕日^{ゆづり}が、三人をうしろからや
さしくてらし、歌声^{うたごえ}はだんだんと高くなりな
がら、こちらへちかづいてきます。





春 泥棒っ子／もくじ

8

1 おらたちのこと

8

2 春分の日

15

3 あつ、火事だ！

22

4 たまごどろぼう

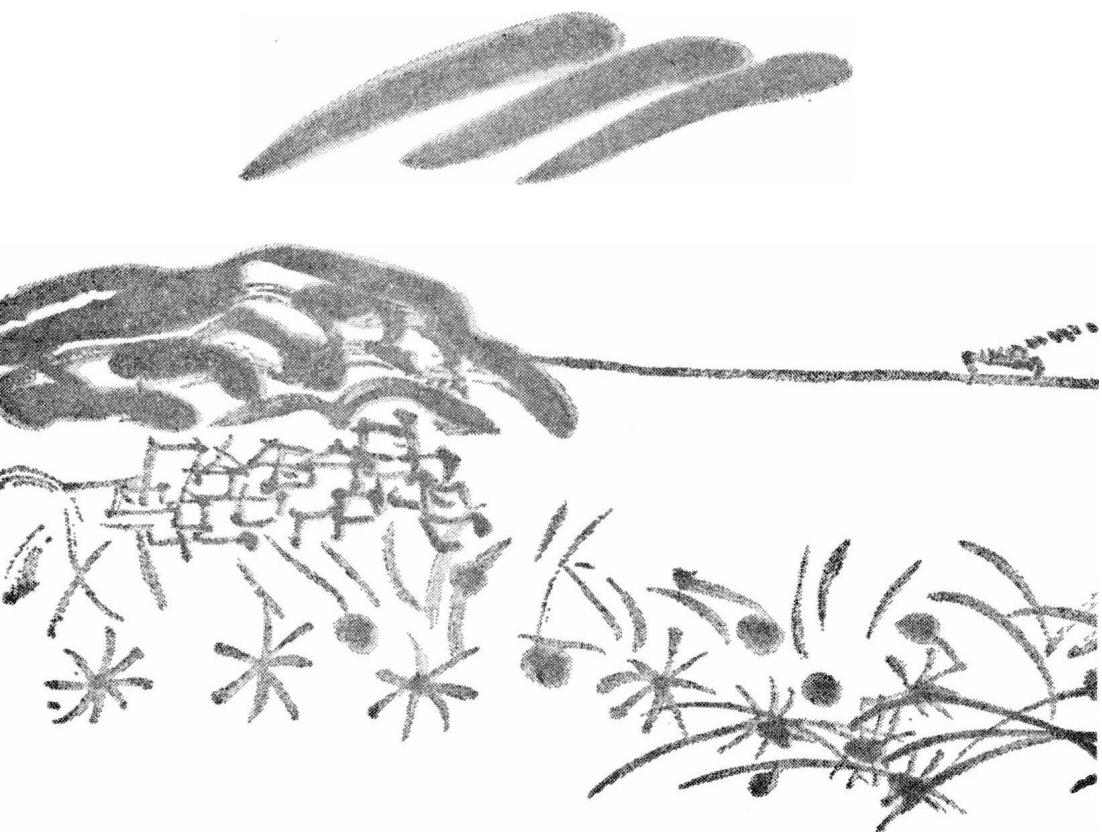
30

夏

1 野菜売り

36

36



秋

- 2 いじめっ子に負けるか！
3 ザリガニゆるしてや
4 作兵衛鳥

52 62 72 80

冬

- 1 なんだかくさいぞ
2 おっぱいみたいなまり
3 一等をとるぞ！
4 まるっ子の勉強
5 プン子

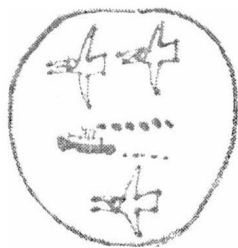
80 85 96 107 118 126

また春が

- 1 作じいの死
2 おら、負けんぞ！
3 とうちゃんにあいに
4 かえってきたとうちゃん
また春が
1 あたらしい希望
2 大阪へ

187 174 159 143 126 187 187 200 210

作者と作品について 砂田 弘



著者・川竹 嵯峨夫（本名政次）

1917年、高知県に生まれる。専修大学中退。
小川未明、浜田広介、後藤植根氏らに師事。
1972年より藤沢市などで童謡展を開催する。
日本音楽著作権協会会員。作品に童謡集「平
和の白バラ」「川竹嵯峨夫童謡集」などがある。
現住所／横浜市戸塚区影取町 223

画家・北島 新平

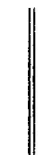
1926年、福島県に生まれる。1944年に長野県
に移り、71年上京するまで県下の中学校で教
鞭をとる。「遠山祭り」「坂部の冬祭り」「新
野の雪祭り」のスケッチ集。「きょうまんさま
の夜」「てんりゅう」「春駒のうた」などのさ
しえ多数。現住所／川口市上青木町3-1373-2

泥^{どろ}

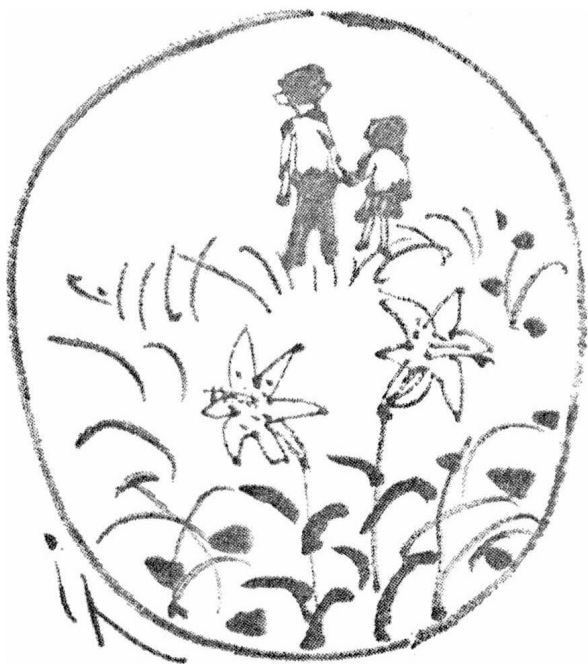
棒^{ぼう}

つ

子^こ



川^{かわ}
竹^{たけ}
嵯^さ
峨^が
夫^お



春

1 おらたちのこと

四国^{しこく}の春は、お遍路^{へんろ}さんからはじまるっていう。おなじ四国でも、おらたちの住む高知県^{こうちけん}はいちばん南^{みなみ}のせい^{せい}か、その春がとってもはやくくる。

南^{みなみ}の丘^{おか}の山ツバキの木は、十二月になると、もう赤い花をつけ、一月には、畑^{はたけ}のレンゲもさきはじめる。

二月はもうすっかり春だ。高くすんだ空から、アゲヒバリの声といっしょに、あかるい光が、あふれるほどふりそそぐ。黒ぐろとした畑の土のおいが、村じゅうにひろがる。まったく絵の中にいるような、いい気もちだ。

近ごろはすこしへったけれど、下の町の街道筋^{かいどうすぢ}を、白衣^{びやくい}にすがさ姿^{すがた}のお遍路^{へんろ}さんが、三人、五人とつれだって、鈴^{すず}を鳴らしてとおりはじめるのもこのころだ。道のりょうがわには、のびだ



した麦や菜の花がつづき、農家の庭に紅や白のモモの花がさいている。

おらは氷川政二。四年生、いや、ひと月もたてば五年生だ。おらの家のものは、喜作兄ちゃん、妹のまるっ子と……それだけだ。かあちゃんも、とうちゃんも、いまはいない。

「いくら、夫婦げんかのあげくとはいってもものう。おつかさんが、子どもをおいて、家出しくさるなんて！」

となりの作じいはいう。まるで自分のむすめがにげたように、むきになっていう。

「おまけに、おやじのほうは、悪いなかまどろぼうなんぞしくさって、他人様をきずつけよって、刑務所ゆきだ。まったくそろいもそろって、あぎれた親たちだ！」

作じいはおこっている。これは、もうなんどもきかされたことばだ。

おらたちの小学校は、村のまん中によこたわっている谷をわたった東の丘にある。でも、学校なんかいいほうがいい。おら、学校へいくのがいやなんだ。おらのことを、「どろぼうっ子！どろぼうっ子！」って、みんながかまうからだ。それから、「くさい！くさい！」って、いうんだ。なかでも、武夫、七郎、大吉の三人が、いちばんしつこい。そばをとるとき、わざと鼻をつまんで走ったりする。

「くさい君。」

島村先生まで、ふざけていることがある。おら、そんなとき、先生もだいきらいだ。

まあ、おらがくさいのもむりはない。町のふる屋へいくのは、月に一回あるかないかだもんな。近所では、どこでも家でふるをたてる。でも、おらたちをいたくないらしく、どこもよんでくれない。着るものだって、毎日おなじものばかり着ているから、くさくなる。

二期の通知票をもらったときだって、武夫は、おらののをのぞいて、「オイッチニッサン、オイッチニッサン」と、からかった。3と、2がほとんどで、1もすこしあったからだが、くやしくてわすれられない。

武夫は、4と5ばかりだった。島村先生のお気に入りだからな。高知市からこっちへかわってきた先生は、武夫の家に下宿している。武夫のおとうは役場の助役だ。それで武夫は、村長みたいにいばっている。

でも、おらだって、国語だけは4だった。

「おまえは、作文だけが取り得だ。」

島村先生は、ほめているのか、けなしているのか、わからないようなことをいう。

おらは、あんまり頭がよくない。けど、中学二年の兄ちゃんはすごくできる。中学へはいつ、ずっと一番で、もちろん通知票は、いつも5と4ばかりだ。

兄ちゃんは朝四時半におきて、自転車で下の町の新聞販売所へいく。朝刊の配達をしてかえってくる、おらたちの朝飯のしたくをしてくれる。下の町の中学へいつている兄ちゃんは、学校

がおわってから、夕刊の配達もしてくる。とうちゃんがいなくなってから、ずうっとそうやってるんだ。配達代は月に一万五千円くらいもらってくる。それで、おらたちの食べるものや、着るものを買う。

五つになった妹は、丸美っていう名まえだけれど、おらたちはへまるっ子〳〵といってる。まんない顔をしてて、目もまんなだから、びったりだ。

かあちゃんもとうちゃんもいなくなったので、おらと兄ちゃんは、まるっ子を作じいにあずけて学校へいく。おらたちは、まるっ子を、幼稚園にもあげてやれない。

作じいは、となりの山中の家のいんきよで、物置小屋の四じよう半に住んでいる。もとは陸軍の将校だったそうで、戦争でうけたきずのため、右足がすこしわるい。いつか、軍服姿に軍刀を持って、四角ばってとった写真を見せてもらったことがある。けがをしてかえされたので、戦死しないですんだといっていた。

十年ばかりまえまでは、県の傷痍軍人会の副会長をやっていたとかで、母屋には県知事からの表彰状がかざってある。その床の間には、みごとなオナガドリのはく製もかざってあって、作じいの養子のダンナは、これがとてもじまん。

作じいは、おらたちがあそびにいくと、いろりでかきもちなんかをやいてくれる。それを食べながら、いろりばたで作じいの話をきくのはだいすきだ。戦争の話や、キツネにばかされた話を、



作^きじいはいっぱい知っている。もう七十のはずなのに、とってもよくおぼえている。

どろぼうっ子でも、びんぼうでも、作^きじいは、おらたちをかわいがってくれる。ほんとに、おらたちはびんぼうだ。食べるものがないことが、よくある。

「びんぼうなのは、おらたちだけじゃない。生活^くが苦^{くる}しかったり、事業^{じしぎやう}で失敗^{しっぱい}したりしよって、死んでしまう人たちだってたくさんおるきに。ほれ、見ろ。」
兄^{しん}ちゃんは、持^もってかえった新聞^{しんぶん}を見せながらいうが、まるっ子はちっともわからないらしいし、おらだって、びんとはこない。金のある人は、おいしいものが食べられ、金のない者は米も買えない

なんて、おなじ人間なのに、おかしいとおもう。

作じいは、まえにはダンナの目をぬすんで、米を持ってきてくれたが、それが見つかって、い
やみをいわれてからは、できなくなった。そのダンナは、兄ちゃんがもらってくる朝刊と夕刊を、
月にたったの五百円で買っている。まったく山中のダンナのけちっぷりといったら、たいしたも
んさ。

「喜作よ。なにもおまえ、そんなに苦労しちよらんで、生活保護というやつでたすけてもろうた
らえい。」

といって、作じいは、民生委員にも話してくれたが、兄ちゃんは、いうことをきかない。

「おらは、とうちゃんがかえってくるまで、がんばるきに。」

おとなしいようでも、こういうときの兄ちゃんは、とても強情だ。そして、兄ちゃんは、おら
たちのために、よくはたらいてくれる。新聞配達をするほか、作じいにおしえてもらって、畑に
つぎつぎと野菜をつくり、それを下の町や、もうひとつ遠い町まで売りにいく。

学用品を買う金がないときは、たまごを売ることもある。おらのところの小屋には、もとはメ
ンドリが五羽いたけれど、病気で一羽死んで、のこりはイタチのやつに全部やられてしまった。
イタチはニワトリをころしておいて、その血をすうのだそうだ。

いつだったか、おらが畑のすみで、それらしい巣穴を見つけて、

「この穴あなの中に、イタチがおるぞ。」

といったら、まるっ子は、

「ヤイ、イタチ、ニワトリカエセ、コノニヤロウ！」

って、どなりながら、長い棒ぼうでつついたっけ。

おらたちはしかたなく、とうちゃんの妹の高子たかこおばやんの家から、また、中ちゆうびなを三羽ぱもらってきた。いまいるニワトリが、それだ。おばやんとこの勇いさむおんちゃんは、下の町の農協のうきようにつとめながら、村会議員そんかいぎいんをやり、ビニールハウスで、ナスやピーマン、キュウリなんかをつくっている。おんちゃんとこの勇次ゆうじは、おらと同級どうきゆうだ。

でも、おらのとこのニワトリは、かわいそうだ。ジャガイモの皮や、しなびた菜な葉はばかりで、ろくなえさをもらえない。だから、シャモみたいにやせている。ほら、ケツ、ケツ、ケツって、トリ小屋でおこつて。いや、ひょっとしたら、たまごをうんでくれたのかもしれないぞ。

なき声がきこえる。まるっ子だ。また、駄菓子屋だがしやのお源げんばあさんにでもいじめられたのかもしれない。あのばあさんときたら、根性悪こんじょうわるだ。

このあいだも、菓子かしをとったといって、まるっ子をひきずってどなりこんできた。

「親おやのようにて、子どもまでどろぼうしくさる。」

わんわんなくまるっ子を、つきとばして、そういった。おら、くやしくつって、まるっ子までに

くらしくなっちゃった。

あれ、家のまえまできて、まるっ子のなき声がやんだ。

「まるっ子、なにしたや！」

外へとびだしてみると、まるっ子は、目にあてていた両手^{りょうて}を、皮をひんむくみたいにはなした。まんまるい顔で、ニヤツとわらってみせる。ちえっ！　またうそなきなんかで、おらをだましたんだ。

2 春分^{しゅんぶん}の日

遠い北の山の雪もすっかりきえて、きょうは春分^{しゅんぶん}だ。朝飯^{あさめし}がおわると、すこし時期^{じき}がおくれてしまったジャガイモ植え^うをした。作^きじいも一時間ばかり手つだってくれた。

半分^{はんぶん}に切った種イモ^{たね}を、切り口を上にして、三十センチくらいはなしてならべていくと、あとから兄ちゃんが、堆肥^{たいひ}と土をかけてくれる。作^きじい^いが切って、切り口へ灰^{はい}をつけてくれた種イモ^{たね}を、まるっ子がおらのところまではこんでくる。

「コノイモ、イツ、クエルンヤ。」

くるたびに、うるさくきく。

「百よりずっとねにゃあ、食えやせん。」